
クラシック鑑賞記～コンサートホールへ行こう！

—◆—演奏会情報—◆—

2012. 5. 28 (月) 大阪交響楽団第 166 回定期演奏会

(会 場) 大阪 ザ・シンフォニーホール

(曲 目) [1] リヒャルト・シュトラウス 組曲「町人貴族」 ※
[2] リヒャルト・ヴェッツ 交響曲第 2 番

(指 揮) 児玉 宏

(管弦楽) 大阪交響楽団

※ (ピアノ) 石井 克典

—◆—鑑賞記—◆—

[はじめに]

「二人のリヒャルト」と題された今夜の演奏会。リヒャルト・シュトラウスは、年始のクラシック音楽番組で良く放送されている「ニュー・イヤール・コンサート」でお馴染みの作曲家の一人だが、もう一人のリヒャルト・ヴェッツは、初めて聞く名前だ。

さて、どんな曲で、どんな演奏となり、楽しませてくれるのか、音楽監督の久々の定期演奏会を心待ちにホールへと足を運んだ。

月曜日ということ、そして、演目があまりメジャーでないことなど、満席というには程遠いが、この 4 月からオルガン席（舞台の後、演奏者と同じ目線の座席）が開放され、1,000 円という価格設定もあり、案外、埋まっていたことが微笑ましかった。

[1] リヒャルト・シュトラウス 組曲「町人貴族」

パンフレットからだが、この組曲は、もともと演劇と歌劇が一体となった意欲的な作品として作曲されたが成功せず、その中から劇音楽の部分を取り出し再演するも不発。1920 年 1 月に忘却の淵から救い出すべく、管弦楽のための組曲として再構築し、ザルツブルクで本人自らの指揮で初演された作品が、この組曲だそうだ。

全部で 9 曲から構成されていて、一つ一つはとても面白いが、なるほど、曲全体のバランスというか雰囲気、どうも統一的でないと感じたのは、そのためだと分かり合点がいった。

さて、演奏そのものは、30人程度の小さな編成で演奏される。そのため、奏者一人一人の力量が問われる作品といえる。大阪交響楽団の力の見せ所である。しかし、第1曲は、どうも迷いがあるというのか、そろわない。雑な印象を受けた。もともと、そういう「ぎこちなさ」をテーマに作曲されている部分なので、より慎重さが必要だ。

第3曲のヴァイオリンソロが入り、この辺りから少ししまりが出てきた。曲にメリハリが付いてきたというのか、ハーモニーがそろいだす。

第4曲は、ヴィオラ、チェロの低音パートから静かに始まる。これがとても心地よい響きで、うっとり聴き入ってしまった。とても良い調べだった。ヴィオラのあの優しい響きが、とても良い味を出していた。

終曲第9曲は、副題が「宴会」となっており、その名のとおり、華やいだ音と音が会場を包み、にぎやかに曲を終える。聴き終えて、なんともシュトラウスらしい曲に心が弾んだ。ウィーンっ子・シュトラウスの生んだ音は、まさにウィーンの風と共に会場に花を咲かせてくれたように感じた。

[2] リヒャルト・ヴェッツ 交響曲第2番

リヒャルト・シュトラウスは御存知でも、リヒャルト・ヴェッツ (1875-1935) については、御存知でない方が多いのではないだろうか。

実は、このヴェッツのたどった道を、つい先月末、ドイツを訪ねた際、たどっていたことに驚いた。ヴェッツは、1875年、ドイツ領ポーランドに生まれ、ライプチヒ音楽院で学び始める。そののち、ミュンヘンに移り住み才能を開花させつつ、1906年にエアフルト音楽協会の音楽監督に任命され、亡くなるまで同地で暮らしたという。途中、ワイマール音楽院で作曲の教鞭をとったり、ベルリンなどでも活躍した。旧東ドイツ、とくにテューリンゲン州を中心に活躍した音楽家というわけだ。

テューリンゲン州は、「ゲーテ街道」と呼ばれるベルリンからフランクフルトまで、ちょうどドイツを斜めに東から西へと結ぶルートの中に位置する。近代ドイツの源流が、そこには脈々と流れている。まさに、ヴェッツが生きた時代は、宗教改革の祖=マルティン・ルター以降、ゲーテへと受け継がれ、彼らがまいた種が、ようやく花を咲かせようとしてた時だったのではないかと思う。彼の曲からは、そんな蕾が膨らみ、「花が咲くぞ!」と言わんばかりの何かそういった気持ちというか情熱のようなものを感じた。

それを何よりも良くあらわしていたのが、第1楽章だろう。「Mäßig bewegt (Hauptzeitmaß)」と記されている。直訳すれば、「程よく激しく (中心となる速度・テンポ)」ということだ。出だしは、朝を連想させるような爽やかなハーモニーから始まり、その曲調をもとに曲が進む。心地よい盛り上がりを見せながら、フィナーレへと向かう。音楽に、音に、包まれている幸せを感じさせてくれる、まさにそんな楽章だった。

第2楽章は、「Langsam, mit klagendem Ausdruck」、「ゆっくりと、悲しみの表現を持って」だ。悲しみというより、わたしには、不安とか不穏とか、そういう緊張感のある状況を、肅々と歩いて行く、そんな印象を受けた。

第3楽章では、その不安や不穏な面持ちを払いのけ、晴れやかな気持ちへと切り替わり、進み行く様が描かれているような雰囲気だった。ホルンのファンファーレから始まり、それが他の楽器の目覚めを告げる。フィナーレでは、管楽器のファンファーレと弦楽器の音が融合して曲を結ぶ。決して、ただ華やかな賑やかな感じではなく、楽器ごとの音が音を築き上げ、アンサンブル

によって締めくくるといった曲だった。実に素晴らしい。

ややドイツびいき、とくに東ドイツ、とはいえ、このヴェッツの意図は、十分に伝わったのではないだろうか。こんなに素晴らしい交響曲が、あまり演奏されていないとすればもったいない。ヴェッツの他の曲も聴いてみたくなった。渡独する前に、この曲を聴いていたなら、もう少しヴェッツの足跡に触れることが出来たかもしれないと思うと、少し残念でならない。

[3] おわりに

大阪交響楽団は、着実に歩みを進め、プロオーケストラとして一層の魅力を増してきたと感じている。しかしながら、アマチュアではないが、10年前の頃と比べると、少し面白味に欠けてきたように思う。

わたしの感じ方が変わったためかも知れないが、「音楽に対するがむしゃらさ」といえば良いのか分からないが、そういった熱っぽさが伝わってこない。専門家ではないので、素人の感覚として、「記憶に残る演奏」というのが減ってきたように思う。

ウィーン・フィルやベルリン・フィルといった世界一級の演奏と比べても、決して引けをとらぬ熱さが以前はあった。堅実な演奏にはなってきたが、わたしは以前のような熱っぽさのある大阪交響楽団の演奏が忘れられない。

曾我大介、児玉宏と実力派が音楽監督を務め、もう数年が経つ。基礎固めが終わり、次のステップとして、音楽に対する思いが演奏から伝わって来る。そんなコンサートに出会える日を楽しみに次からの定期公演にも足を運びたいと思う。